六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

佐藤允 画家

Ataru Sato / Painter

CREATOR INTERVIEW No 162

佐藤允　Ataru Sato

1986年、千葉県生まれ。現在は東京を拠点に制作活動を行っている。2009年に京都造形大学芸術学部情報デザイン学科先端アートコースを卒業。佐藤允にとってのドローイングとペインティングは、自身や身の回りの存在を取り巻く人間の複雑な内情を記録し解釈するためのツールであり、印象的で正直、時には挑発的なイメージで個人的なテーマを探求している。作品は、「アートのためのアート」や新しさ、意味を求めることをしないと考える。2011年と2015年にギャラリー小柳で個展を開催した他、ニューヨークやブリュッセルでも個展を開催。主なグループ展に「第８回光州ビエンナーレ」(2010)、「ヨコハマトリエンナーレ2011:OUR MAGIC HOUR―世界はどこまで知ることができるか?―」（2011）、「Inside」（パレ・ド・トーキョー、2014）、「INTERPRETATIONS,TOKYO - 17世紀絵画が誘う現代の表現」（原美術館、2019）、「堂島リバービエンナーレ2019」（2019）、「やんばるアートフェスティバル 2022-2023 シマを繋ぎシマを響く」（2023）、「LA MORSURE DES TERMITES」（パレ・ド・トーキョー、2023）がある。作品は、高橋龍太郎コレクション、ルイ・ ヴィトン・マルティエにパブリックコレクションとして収蔵されている。

クリエイターインタビュー

『すでに存在するアートを大事にしたり、愛称をつけてみたりする』

No 162 佐藤允 画家

ATARU SATO / Painter

表現はどこまでも自由。間違っているアートなんてない。

published_2024.11.6 / photo_kohey kanno / text_noemi minami / edit_shawn woody motoyoshi

「絵を描くことは生きることそのもの」と語る、画家の佐藤允さん。緻密な描写と独特な世界観で、世界的に活躍する日本人アーティストの一人です。現在、国立新美術館で展覧会が開催されている田名網敬一さんに大きな影響を受け、京都造形芸術大学入学を決意。大学在学中から作家活動をスタートさせ、アメリカやドイツなどで開催された展覧会では作品が完売するほど人気を博しました。卒業後は「エスパス ルイ・ヴィトン 東京」にて、日本人アーティストに初めて焦点が当てられた、グループ・エキシビション「Cosmic Travelers - Toward the Unknown（コズミック・トラベラーズ - 未知への旅）」に参加。フランス、パレ・ド・トーキョーでは「Inside」（2014 年）を出展するなど、国内外で注目を浴びています。そんな佐藤さんに、『記憶の冒険』展と関連したお話や、ご自身のアートに対する思いをお聞きしました。

『記憶の冒険』展を通して、田名網敬一と出会いなおす。

田名網先生の『記憶の冒険』展にはもう何度も通っていますが、ずっと何を見ているかわからない。アートって、作者の意図を聞くと「あぁ、このアーティストはこんなことを伝えたかったんだな」って結構安心しちゃうじゃないですか。でも『記憶の冒険』展は、わからなくても良いまま、ずっと見ていられる。見ることで、体験として体に刻んでいるような感覚です。田名網先生が亡くなってから、また出会いなおしているような感じがあります。「記憶の冒険」ということがこの展覧会のなかで表現されていて、また僕の記憶にもなっていく。まだもう少し、体に残したいなと思い、足繁く通っています。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

田名網敬一

武蔵野美術大学在学中にデザイナーとしてキャリアをスタートさせ、1975年には日本版『月刊PLAYBOY』の初代アートディレクターを務めるなど、雑誌や広告を主な舞台に、日本のアンダーグラウンドなアートシーンを牽引してきた。その一方で、1960年代よりデザイナーとして培った方法論や技術を駆使し、絵画やコラージュ、立体作品、アニメーション、実験映像、インスタレーションなど、ジャンルに捉われることなく精力的に制作を続け、美術史の文脈に重要な爪痕を残している。
クレジット：©Keiichi Tanaami / Courtesy of NANZUKA

『田名網敬一　記憶の冒険』

現代的アーティスト像のロールモデルとも呼べる田名網氏の60年以上にわたる創作活動に、初公開の最新作を含む膨大な作品数で迫る、初の大規模回顧展。国立新美術館にて、2024年8月7日（水）から11月11日（月）まで開催中。
クレジット：©Keiichi Tanaami / Courtesy of NANZUKA

表現というのは、どこまでも自由。

僕が今みたいに絵を描くようになったのは、田名網先生に出会ったからなんです。もともと絵は描いていたんですけど、両親も不安がるような誰も喜ばないような絵で。だから小学校でも宿題で絵を描くようなことがあれば、自分の絵だと、先生に怒られると思うから親に描いてもらっていたこともあります。好きなんだけれど、ずっと表に出さないようにしていました。ただ、高校3年生のときに SUPERCAR（スーパーカー）というバンドがリリースしたアルバム、『ANSWER』のアートワークを田名網先生が手がけていて。その作品と出会えたおかげで、僕も絵を描いていいのかなと思えたんです。田名網先生の世界って、エモーショナルではないんですよ。僕はそれを見て、天国でも地獄でもない、別の場所が与えられているような気がしたんです。ちょうどその頃は行き場がなくて、将来についても迷っていました。そんなときに居場所をつくってもらえた。だから、絵を描き続けられたのです。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

『ANSWER』

ロックバンドのスーパーカーが2004年にリリースした5thアルバム『ANSWER』のアルバムアートワークを田名網敬一氏が手がけた。
提供：(株)ソニー・ミュージックレーベルズ

2004年の春に、初めて田名網先生の作品を拝見して、その年の夏には田名網先生が教えていた京都造形芸術大学を受験しました。試験のために作品を提出しなければいけなかったのですが、「作品」の意味すらわからなかったから、高校のテスト用紙の落書きを持っていったんです。それがGallery Koyanagiの小柳敦子さんのところにわたり、すぐにデビューってことになったので、アーティストになりたいとか、そういうことではじめたわけじゃないんですよ。だからいまだにアーティストってなんなんだろうって考えたりします。でも、絵を描くことしかできないから続けています。

田名網先生の世界って、自由であることを表していると思うんです。戦争というすごく不自由なことを体験したはずなのに、あの世界をつくり続けている。表現というのは、どこまでも自由だなと思うし、間違っている鑑賞なんかないと思っています。鑑賞する人もどこまでも自由であることが大切です。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2024.11.06 / photo_kohey kanno / text_noemi minami / edit_shawn woody motoyoshi

絵画は、どこまでやっても天狗になりようがない世界。

僕が絵を描く上で大事にしているのは、制限を設けないこと。あと、「わからない」を否定しないこと。表現に対して人が決めた「これはいい」「これは悪い」「これはやりすぎ」っていうのがあると思うんですけど、そんなに人の意見に左右されなくてもいいのかなと思います。僕は答えを探してやっているわけじゃないから。

たとえば、僕は男性同士がセックスしている絵を描くことがあるんですけど、僕が LGBTQ+の権利活動をしている人なのかと聞かれても、別にそれが目的ではない。普通の恋愛が何かなんて人によって違うし、わからないじゃないですか。逆にラベルで制限を持たせることが誰かを追い詰めることになるくらいだったら、勝手に自由にやろうと思っています。そんなの放っておいてほしいというのもありますが（笑）。そんなに何かに重く責任を持たせちゃいけないと思うんですよね。結局、アートも街も、なんのためにあるのっていったら人のためにあるので。頭でっかちになっちゃうのは危険だと思うんです。

僕は、田名網先生から多大な影響を受けていますが、田名網先生以外でいうと「過去の人たち」からの影響もあります。絵画っていうメディアはすごく面白くて、というのも、どこまでやっても天狗になりようがない世界なんです。キャンバスや紙に絵を描くという行為は、果てしない昔から続いています。だから完全にオリジナルの絵を描くのってすごく難しい。でも、そこに喜びを得られるのなら、コピーのコピーのコピーでもいいと思うんです。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

絵がいいな、と思うのは、描いたらもうそれで良いことです。絵の前で僕が何かを説明するときに、もしも絵に意識があったら、一番邪魔なのは僕だと思うんですよ。絵は自分自身で表現しているんだから。その絵が描けたこと、それが誕生して、守られ、今ここで見られていること。頭の中で思い出して再現できることも含めて、僕は作者っていうのはそこまで必要ではないのかなって思います。

アートという許容の世界にいたいだけ。

僕には絵を描くこと以外に何もないんですよ。たとえば、苦しいことがあったときに、「じゃあみんなでカラオケ行こう」とか「お酒飲もう」とかってことができなくて。苦しいときには絵を描いて、楽しいときにも絵を描いている。あと、すごい淋しがり屋だけど、絵を描けばどうにかなるから、一人じゃないと思えるんです。それによってすごく悩むこともあるのですけど。やっぱり、描くことは僕にとってはかけがえのない行為ですね。

自分の作品がアート業界の文脈でどう存在しているかにはあんまり興味がなくて、ただ続けることを考えています。だからなのか、いまだに自分のことをアーティストだと思っていないんです。アートっていうのは許容の世界なので、自分もそこにいたいだけなんです。でも、ある程度の評価がないと続けられないのも事実で、いろんな人の力を借りて展示をやり続けています。できるだけいろんな人に見てほしいですし、感想としては「うぇ気持ち悪い」でもいいんです。

ある意味、すごく高飛車ですよね。受け止めてくれって言ってるわけだから。ただ、僕の絵を見て「自分のように見えた」と共感してくれる人もいて、それは僕にとっての希望になるんです。僕はそういうふうにしか描けなかったけど、いろんな見方をしてもらえて嬉しさを感じるのです。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2024.11.06 / photo_kohey kanno / text_noemi minami / edit_shawn woody motoyoshi

絵を描くことはセラピーでもある。

僕にとって、絵を描くことは、趣味でも仕事でもあるし、生きることそのものなんです。たとえば失恋したとするじゃないですか。そしたら1日目は、大きな絆創膏に子どもが包まれて寝ているイメージがでてくる。2日目は大きな穴が2つ空いているイメージがでてくる。ひとつは田名網先生のことで喪失している穴、もうひとつは好きな人を失ったことで空いた穴。裸の人が立っていて、胸から大きな百合の花みたいなのが咲いて、内面を表している。壁が神経みたいに痛そうに広がっている …。そういうふうにイメージがでてきちゃうんです。吐き出さずにはいられないんでしょうね。だから、一種のセラピーですよね（笑）。

街に生活が露出してるくらいがちょうどいい。

もっと街がクリエイティブになるには、町内会のチラシを描いてみたりするのはどうでしょう。模造紙でざっと描いちゃうのもいいかもしれないし、みんなでいらない紙を持ち寄ってきてもいい。「わざわざアートのために紙をこしらえるのやめない?」って思うんですよ。もしくは、街中のオブジェを清掃するなど、すでに存在するアートを大事にしたり、みんなで愛称をつけてみたりしてもいいかもしれないですね。街そのものを愛したり、住んでいる人にスポットライトを当てるのがいいんじゃないでしょうか。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

そもそも僕は街ってダサくあるべきだと思ってるんですよ。どんぶり鉢みたいなのを持って、たとえば「今日はとんかつだな」って思ったら、とんかつ屋さんに行って、ラップもかけないで家に持って帰って食べるみたいなことがあってもいい。それを路上で食べたっていいじゃないですか。食器だって、公園で洗ってぶらぶらしながら帰ればいいじゃないですか。それが苦手な人たちもいると思うけど、生活がもうちょっと露出したらいいかもしれないですね。僕は服も破れてたら直しますし、なんとも思ってないんですよ、そういうの。それよりも生きづらさからの脱却が大事。かっこつけなくていい街が僕にとっていい街ですね。

実際に僕は子どもの頃、千葉の小江戸とか言われるようなそういう街で育ったんです。田舎だったんで「とんかつ買ってきて」って言われたらお皿を持って歩いて行ってました。でも川越のように観光で成功してはいなくて、その頃の建物のままでみんなが生きている（笑）。

六本木で出会った、価値観を変えた展示。

2006年に森美術館で開催されていた「杉本博司 時間の終わり」という展覧会を見て、価値観が変わる経験をしました。僕がギャラリー小柳に所属したすぐ後くらいで、写真というジャンルがあまりわからない中で、見に行きました。フライヤーにポーラーベアの写真があったから「冒険写真家なのかな？」くらいに思っていたんです。実際に見に行ったら、それはコンセプチュアルアートで。ダイアナ妃や昭和天皇の写真があるんだけど、そこにちゃんと一個ずつテキストがついていて。「これはマダム・タッソーの写真を撮ったものである。これがもしも生きている人間を写したものとして認識したならば、あなたは生きるということをもう一回考えてみるのがいいかもしれない」と、そんなようなことが書いてあった。実際は、蝋人形を撮影した作品だったんです。ただの写真一枚とテキストでこんなことができるのかと感激したんです。だから鑑賞者の1人としても今後、六本木界隈で何が起こるか楽しみです。

杉本博司 時間の終わり

森美術館で2005年9月17日から2006年1月9日まで開催された杉本博司氏の個展。1975年から2005年に制作された杉本の代表的なシリーズが初めて一堂に会した。

キャプション：ユーエー・プレイハウス、ニューヨーク(1978年) ゼラチン・シルバー・プリント

©Hiroshi Sugimoto / Courtesy of Gallery Koyanagi

他にも感動したのは、イヴ・クラインの《青いカクテル》という作品です。イヴ・クラインがパリで開催した展覧会「空虚」で、観客に青いカクテルが振る舞われ、ギャラリー内は真っ白に塗られた空っぽの部屋があるだけだったそうです。それを集団で飲むという行為がアートといえるかもしれないし、観客はそれぞれに、ああだこうだと話していたそうです。それで翌日、トイレに行ったらみんなのおしっこがブルーだったんですって。それがもう、すごいと思ったんですよ。展示室から飛び出たアートになっているので。これは過去の作品として偶然知って、想像する喜びがありました。こんなふうに、価値観や自分の既存の考えがアートによって変わったり、拡張したりすることを、過去に何度か経験しています。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2024.11.06 / photo_kohey kanno / text_noemi minami / edit_shawn woody motoyoshi

絵を純粋に鑑賞できる条件は平和であること。

最近だと、すごく刺激を受けたのが朝吹真理子さんという小説家が今書いている『ゆめ』です。装丁で関わらせてもらったのですが、実は小説が完結していないのに先に装丁ができたんです。すごく変わったやり方をしていて、僕はこの小説を読んだことがないなかで、イメージだけ伝えてもらって絵を制作し、小説部分よりも先に表紙ができちゃったんですよ。その絵を彼女が部屋に飾って小説の続きを書き出したんです。だから僕は物語とすごく変な関わり方をしていて。だけど僕がそこで何か小説に影響を及ぼしているわけでもない。しかもその後実際に『ゆめ』を読み進めていったら、その表紙は間違ってないように僕には思えました。

『ゆめ』は、戦争に関連する話で、朝吹さんはこの執筆をする以前から、ずっと戦争の聞き書きをしています。戦争反対ということは大前提としてありますが、それよりも人が何を起こすのか、そして何を起こしてきたのか、ということに触れる内容で、すごい作品です。僕はあんまり身内贔屓とかしないんですけど、これは名作になると思っています。彼女と話す中で、新作もいくつか制作したので今後どうなるのか、この物語の完成がとても楽しみです。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

絵の未来は、僕は、平和にあると思っています。平和でなければ絵を描くのって難しくて。過去を振り返れば、絵はプロパガンダや情報操作に使われてきた。絵の悲しいところは、どういうものでも美しさを持ち合わせてしまうところです。平和であることは、絵を純粋に鑑賞できる条件です。そして道具の面でも、絵の具にしたってなんにしたって、ちょっと国外からの物流が止まったら、一発でもうこの先も手に入らなくなってしまうかもしれません。日々、色彩感覚や技法を磨くべくいろいろ勉強を続けていますが、描ける、ということは、かろうじて今が平和ということなのかもしれません。

撮影場所：『田名網敬一　記憶の冒険』（会場：国立新美術館）

取材を終えて .....

インタビューのなかで、佐藤さんがさりげなく発した、「純粋に考えるとそうじゃないですか」という言葉に佐藤さんのあり方が現れているな、と感じました。社会の風潮や「当たり前」に飲み込まれることなく、ある種の純粋さを保ったまま自分の問いを持ち続ける。とても丁寧な物腰のなかにぶれない強さがあると同時に、作品からあたたかさや透明感を感じるのは、佐藤さんが愛に対してまっすぐで、素直だからなのだと思いました。（text_noemi minami）

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.